

ヨハネの福音書 第6章 12節

「イエスはまた彼らに語って言われた。『わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。』」

世に光が必要である。世には光が満ちている。日中には晴れば陽の光が暑いほど注がれ、曇りであっても薄光が覆う。夜には天空の煌めきや、月明りがある。それに、大通りには灯された光が輝き、場合によっては夜通し光る。このような世に、「わたしは、世の光です」と宣言する。世の光とは異質な光が宣言される。この光は照らすが、同時に従う光である。この光に従う者はやみを歩むことはない。そして、この光を持つ者はいのちの光を持つ。天気がどうなろうとも、大通りがどうなろうとも、光であり、いのちである。

正午ごろ郊外に出向く機会があった。出先で3時間ほど過ごし、帰路につく。電車の中は仕事帰りの者たちや学生で混雑していた。たまたま空席となったところに座り車窓から何気なく外に目をやった。陽はすでに暮れて町あかりが灯り、周りは暗い。そのなかで名残の夏雲が浮かんでいる。すでに夜なのに雲が見えている光景を興味深く追った。暗闇に見える、グレイと微かに白さを輝かす雲はなかなかよい。夜に見える雲、どこからか届く光を反映して輝く。「わたしは、世の光です」と言われたお方を、一つのイメージで思い起こすことができる光景であった。

2023年9月11日